



藤原書店
4,200円

パリ・日本人心象地図

1867-1945

真銅正宏 (天文学部教授) 他編集

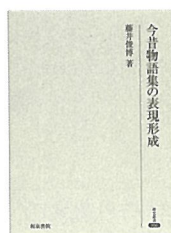
明治維新から第2次大戦争の終わりまでという時期に、短い滞在であれ、長い滞在であれ、ともかくパリに住んだ日本人はどのような人たちだったか、ほぼ80年の間、日本人がパリのどこに親しみ、足繁く通っていたのか、この書物を開いたら本を手離せなくなる。パリの都市空間をいくつかに分けて、次々に文人・作家の島崎藤村、林芙美子ら、哲学者の三木清、九鬼周造ら、経済学者川上肇、社会学者松尾邦之助などの姿が浮かんでくる。彼らの住宅の写真や往事の人物の写真が付けられているが、彼らが暮らしたパリでの

生活、刺激的にみちた知的な環境がそれぞれ1ページか2ページにわたって短く紹介されている。その中では興味深い逸話的ななども生き生きとした形で第2部に語られている。

しかしこの書物はそれだけでなく、第1部においてパリ在住の日本人たちが形成していた当時の日本人社会はどのような社会だったか、それをいくつかの観点から分析する。すなわち、そのコミュニティの核となる日本大使館・日本人会・日本人商店を紹介するし、画家、知識人、詩人、音楽家などの活動も明らかにする。

意外に日本人の少ないパリにおいてどの地区に自分の居場所、心地のよい住まいを置いたか、この本は単にパリという都市そのものではなく、日本人にとつてのパリの地図を描こうとしている。

ゴノン・アンヌ (大学言語文化教育研究センター教授)



和泉書院
9,000円

今昔物語集の表現形成

藤井俊博 (天文学部教授) 著

著者藤井教授は、天文学部国文学専攻に学んで卒業論文に今昔物語集を取り上げ、研鑽を重ねること爾来20年、大学院生活を送った龍谷大学から、先般、博士号を授与された。本書はその学位論文である。

文章は、話されたままでは整わず、記されて漸く確立する。平安時代は、仮名を獲得して日本の文章の産みの苦しみを闘い続け、古今和歌集・伊勢物語・源氏物語など、日本文学の源流となる作品を克ち取った。

平安時代は、また、説話を飽かず軋めて書き留めてもいた。820年ころ日本国現報善惡靈

異記、980年ころ日本往生極楽記、1040年ころ大日本国法華経験記、1120年ころ今昔物語集、それぞれ成立。

今昔物語集の文章はどのように形成されたか。日本の文章の淵源・歴史を描くためには、漢文に影響された説話集の雄に、だれかが挑まなければならぬ。用字・用語・否定表現・文末表現など、文章を構成する多種多様な要素につき、藤井教授は、関係する説話集などにもわたって精査して、今昔物語集の特徴が大日本国法華経験記と軌を一にし、すなわちそれを広く深く継承していることを、立証してきた。集大成が本書である。大日本国法華経験記の文章はどのように成立したか。また、大日本の冠名は唐土に対する意味をもつが、唐土の影を濃く残す「記」から日本の「物語」集に、何がどのように展開したか。さらに先に期待を膨らませられる論考である。

石井久雄 (天文学部教授)

幻の三中井百貨店

林 廣茂

(大学ヒジネス研究科
特別客員教授) 著



晩聲社
2,000円

日本統治時代の朝鮮半島(1910~45年)には5つの百貨店があった。うち4つが「三越」など日本系で、その中で最大のものが近江商人の「三中井百貨店」だった。しかし「三中井」は1945年の日本敗戦とともに忽然と姿を消す。この「幻の三中井百貨店」の歴史を掘り起こしたのが本書である。著者は「三中井」を中心にした朝鮮での百貨店の歴史をひも解くことで、日本統治が朝鮮にもたらした大衆消費社会―つまり「近代」を発見する。「三中井」や「三越」それに民族資本系の「和信」などによる百貨店網は、居住日本人のみならず朝

鮮人たちの消費力拡大によって成り立った。

韓国では「日帝時代」といわれる日本統治下で、朝鮮半島の人びとも消費を楽しんでいたというわけだ。これは、韓国の公式史観であり日本の進歩派が好む「暗黒史観」とは異なる。本書は日韓の過去史を多様にかつ多角的に振り返る、暗黒史観批判の見事な内容になっている。

韓国でも最近、日本統治時代を従来の「抑圧と収奪史観」や抗日独立運動中心の「抵抗史観」だけで見るのではなく、「近代への変化」としてとらえ評価する動きが出ている。この「修正主義史観」は若い研究者たちが主導しているが、韓国側にこうした動きが出てくることが日韓の真の「歴史和解」につながる。著者はマーケティングの専門家として現在の韓国ビジネス状況に通じている。現場を知っているだけに歴史分析にも説得力がある。

黒田 勝弘(産経新聞ソウル支局長)

三井財閥の人びと

安岡重明

―家族と経営者―
(大学名誉教授) 編著



同文館出版
2,800円

本書は、戦後の経営史研究において指導的役割を果たしてきた安岡重明名誉教授がオーラル・ヒストリーに基づく財閥史の実証研究の基本的視座構造を明示したものである。

安岡教授は一貫して、財閥経営者と財閥家族という、財閥を構成する2つの異なるグループの複雑な相互作用過程の歴史的、社会学的分析の重要性を強調してきた。本書の章立て―「三井家の人びととの対談の意義」「三井財閥の位置」「三井家の人びととの対談」「三井系経営者等との対談」および「三井各家々憲」について―が示しているように、その最大の特

徴は、1970年代末から80年代半ばにかけて実施された三井財閥の関係者との対談を彼らの「生の声」として収録していることである。

三井高公氏ら三井家の主要人物5人との対談記録は、婚姻・相続・就職などの彼らのプラクティスとそれを方向付けるものとしてのハビトゥスを知ることのできる第一級の史料である。他方、三井系経営者として江戸英雄氏、従業員として上野直藏氏と津下統一郎氏がとりあげられている。とくに、同志社の発展に大きく貢献した上野氏との対談は、同氏の青年期における三越京都支店での勤務体験の貴重な証言記録であり、企業者史の研究者にとっても興味深い史料である。

本書の登場によって経営史や企業者史におけるオーラル・ヒストリーの重要性の認識がより一層深まることを確信するものである。

瀬岡 誠(大阪学院大学国際学部教授)



ナチスの国の過去と現在

ドイツの鏡に映る日本
望田幸男（天文学部名誉教授）著

著者はドイツ近現代史の研究を進める一方で、常に自身の生きる現代日本との対話を大切にしてきたように思う。その成果はこれまでの著作にも明らかであるが、本書は、高度で専門的な内容にもかかわらず、概説書的な枠組みを越えて、現代日本に生きるわれわれ読者の「政治を見る眼」を養うべく書かれた一般向けの啓蒙書として、さらに一歩進んだものに仕上がっている。

本書は、ワイマル共和国はなぜ短命に終わり、なぜナチスが政権を獲得したのか、そして戦後のドイツはどのような道を

歩み、統一後どこに向かっているのか—これらの二つの問いを中心に、ワイマル期、ナチス期から戦後、統一後に至るまでのドイツ史をわかりやすく解説してくれる。「ドイツの鏡に映る日本」という副題のとおり、日本の過去と現在の様々な問題、たとえば大正デモクラシー、天皇制ファシズム、戦後責任問題などが随所でとりあげられ、ドイツとの比較が検討されており、歴史を学ぶことの重要性にあらためて気づかされる。

「ドイツ現代史の筋道を追いつながら、ドイツの過去に問いを発し、それに答えることを通じて、ドイツと日本の過去・現在・未来の対話を試みる」という著者の熱い想いに、読者は必ずやひきつけられるであろう。なお、本書のあちこちにちりばめられたコラム欄は、読者の理解をいっそう深めてくれるだろう。

古澤美穂（天文学部文学研究科）



社会国家の生成

川越 修（天文学部教授）著

著者による公刊物を読む時、「私は一個の他者である」（ランボー）というフレーズをいつも思い出す。本書の序論にもこう記されている。「同時代の資料に基づき時間の流れに沿った過程として読み解く作業は、本書では、現代とそこに生きるわれわれの在り方を考える一つの手がかりになりうる」と。此処と彼処、あの時と今における「と」の視点を、著者は何よりも歴史研究の核心と考えている。

本書は①19世紀から20世紀にかけての社会衛生学や人口学などの知の誕生②その知からせり上がってくる社会国家とその担い手である専門家③ナチ時代を

含む、その後の社会国家の展開を、豊富な同時代資料によって分析している。それはまた、「ナチズムは武力によって打ち倒されたのであって、議論によって打ち倒されたのではない」（ルジャンドル）という問題提起への応答でもあろう。

「正確に理解され、正しく応用されている優生学はナチズムないし何らかの政党の教義と何の関係もないし……人類をより高い発展段階に導き、生きる喜びをもたらすことを目的とする文化の要請に他ならない」（「公衆保健業務」という思考のもとに第2次大戦後も社会国家は引き続き展開され、「生きるに値しない人間」の抹殺を強制収容所なしに実行できる世界に私たちはいる。「ニーズ」や「要請」を担保に、数年前の出生前診断から着床前診断へと大きな摩擦に遭遇することもなく歩みを進める世界なのだから。

柿本昭人（天文学部教授）

今、礼拝を考える



キリスト新聞社
1,600円

一ドラマ、リタジー、共同体―
越川弘英（キリスト教文化センター
専任講師）著

本書は、畏友である越川氏が、アメリカに留学中に日本人教会でもたれる礼拝の大切さを感じ入ったこと、そこから始めた礼拝学の研究、帰国し、中目黒教会、巣鴨ときわ教会という2つの教会の牧師として伝道牧会に励む中で、牧師や一部の役員によって成り立つ教会ではなく、信徒一人ひとりが教会形成の「真の主役」として参与するような教会の形成、その最も中心的な営みである礼拝はどうあればよいのかについて、教会の信徒と一緒に学び合い、話し合うという実践の中から生まれ出てきた書である。そういう意味ではアメリカでの最新の礼拝学の成果を踏まえつつも、その一方で教会の現実の場を根をおろした「生きた実践の書」と言うこ

とが出来る。ただの研究書にとどまらず、読む者の生きる教会の現場に深く届くわかりやすさ、問題のとらえ方があるからだろう。

第1部は、キリスト者の人生における礼拝の意味について、第2部は、「ドラマ」と「リタジー」という言葉をキーワードとしてキリスト教礼拝全体のイメージを考察し、第3部は、礼拝の具体的順序にそってそれぞれの意味を解説している。

わかりやすい文章で、専門用語についての説明も丁寧でとても読みやすい。それぞれに短い文章から成り立っており、初めから読まなくても興味あるところを読んでも、教えられることは豊かである。具体的な説明には当たり前のような事柄の内に、ある新鮮な意味合いに、ハッとさせられることが何度もあった。

今日、キリスト教の礼拝はどうあればよいのか、生きた実践の中から貴重な示唆を与えてくれる本書の出版を心から喜び、広く読まれることを期待したい。

木谷 誠 日本キリスト教団聖賢教会牧師

中国現代文学の系譜



東方書店
5,000円

阪口直樹

（大学言語文化
研究センター教授）著

阪口氏自身の言葉を借りれば、「本書は、著者がおよそ30年間にわたって書きためた文章を、「革命」と「通俗」というテーマを基準としてセレクトして、時系列に配列した論文集」である。本論文集は、第一編 総論、第二編 民国の文学、第三編 建国後の文学、第四編 書評その他、と4つの編を分け、27の文章から構成され、70年間にわたる中国現代文学の系譜を総合的に提示した力作である。

中国が社会主義体制に入り、早くも半世紀を越えている。文化大革命が終結するまで、中国の文学は常に革命文学が主流とされていた。日本での中国現代文学研究も激動する中国の荒波

に翻弄されながら、常にその方向性を見極めようとしてきた。阪口氏の本書収録の「現代中国文学研究の五〇年」は「文革」と同時進行で研究方法を模索した経験と、日中両国における中国文学研究の見直し過程の体験」をふまえて論じた研究史研究の里程標である。

「民国文学史」の構想と課題は、阪口氏が前者『十五年戦争期の中国文学』の上梓をきっかけに、かつての革命史としての中国現代文学史を歴史的に相対化して、展開した画期的な論証である。

「通俗文学」は、中国大陸では長い間抹殺されていたが、阪口氏は、70年代初頭から既に「革命」と「通俗」の問題に着眼し、論を展開してきた。阪口氏の研究は、日本だけでなく、台湾等の大衆文学研究にも光を当てることになるだろう。

于 耀明（大学言語文化研究
センター嘱託講師）

（阪口教授は8月29日に永眠されました。享年61歳。）

声と運動と他者

山形頼洋 (大学文学部教授) 著



明書房
4,800円

本書『声と運動と他者』は、前著『感情の自然』からおおよそ10年あまりを経て公開された、いわばその続編と言うべき研究書である。超越から内在への、時間・表象から感情・感性性への移行を極めて精緻に考察した前著の成果を踏まえた上で、本書では新たに独創的な運動論、行為論、言語論が展開されている。またそれに留まらず、芸術論、生命論、共同体論、他者論にまで考察の射程は及んでいる。著者は、ラントグレーベの研究を手かりとして、フッサール現象学の時間分析が到達した極北である『生き生きした現在』

が、動くこと・運動であるキネステーズであるということを一層正確に言えば、もはや表象的・知覚的身体ならざる行為的・運動的身体であることを明らかにする。さらにそこからアンリがメーヌ・ド・ビラン解釈を通して呈示する身体論に基づいて、運動の身体が感情的身体に基づいているということが示される。こうして獲得された視座から上に挙げた諸事象が取り扱われている。

本書で俎上にのせられている事象は難解で困難を孕んでいるにもかかわらず、それを論じる文体は明晰で精彩に富み、論証は厳密かつ詳細を極めたものである。読者は、著者のしなやかで強靱な思索を丹念に追うことで目の前に新たな展望が開かれるのを感じるようになるだろう。本書は最良の哲学的思索を蔵した、真摯に哲学するものとしての必読の書である。

中村拓也 (大学文学部研究科博士課程)

ホンネで動かす組織論

太田 肇 (大学政策学部教授) 著



ちくま新書
680円

著者によれば、日本の組織にはホンネとタテマエが存在しているという。たとえば社員が会社で地位や評価を獲得しようと思えば、組織的な価値観に沿わなければならない。しかし、いくら会社のために貢献してもそれが評価の網にからなければ処遇に反映されないのが、ホンネではいかに自分が評価されるかが関心事になり、上司や周囲の目を意識した態度や行動をとるようになる。つまり組織的な価値観に従った模範的な社員を演じながら功利的にふるまうという、ホンネとタテマエの使い分けを行うのである。本書では

こうしたホンネとタテマエの剥離を、サービス残業、目標管理、不祥事など様々な面からとりあげる。そして今後日本企業がグローバルな競争を勝ち抜いていくためには、個人のホンネと会社のホンネを一致させる動機付けシステムに変換する必要があることを主張し、そのための具体的手法を提示している。その中には動機付けのループ、「開かれた」成果主義、「逃げ道」など、これまで着目されていなかった大胆な提案が盛り込まれており興味深い。本書では、多くの人々が日々なんとなく矛盾を感じたり、違和感を感じている点を鋭く指摘し、なぜそれが起こるのかをまるでミステリーを解くように分析しており、読者に爽快感を与える。提案されている処方箋も示唆に富み、組織を活性化させたい多くのマネージャーには是非一読をお薦めしたい。

弘中史子 (滋賀大学経済学部助教授)

アメリカの 対人援助専門職

宮本義信 (女子大学生生活科学部教授) 著



ミネルヴァ書房
2,500円

本書のタイトルに用いられている「対人援助専門職」という言葉は「ヘルピング・プロフェッショナル・helping profession」の日本語訳である。著者は1年にわたって合衆国北東部マサチューセッツ州、コネチカット州、ニューヨーク州の「ヘルピング・プロフェッション」の現状を調査し、日本の関連職種との比較、研究、考察を行った。その成果が本書である。

著者はソーシャルワーカーが活躍する様々な機関を訪れ、結婚と家族、学校、虐待、高齢者、嗜癖などの治療、教育に携わるヘルピング・プロフェッションの生の声を聞くことを通して、アメリカのソーシャルワークの

本質に迫ったのである。

アメリカのソーシャルワーカーの資格は、学士、修士、博士という格付けも行われているが、最近躍進しているのは、統合されたサービスシステムの中心で働くヒューマンサービスワーカーである。ソーシャルワーカーが社会諸問題と戦いつつ、クライアントの治療や教育に当たるとすれば、ヒューマンサービスワーカーは統合されたケアサービスの担い手と言えるだろう。この職種も増加するクライアントにきめ細かく、人格的にアプローチするために必然的に資格化されたようである。

アメリカのソーシャルワークは官主導型ではなく、分野ごとの職能団体が自己完結して運営しており、その原点は制度ではなく、クライアントやソーシャルワーカーという個人に置かれていることを、著者はソーシャルワーカーの実際の働きを通して伝えている。

原 慶子 社会福祉法人新生会理事長

社会人大学院で 何を学ぶか

山田礼子 (文学部教授) 著



山田氏は、近年は初年時教育やアメリカ駐在員夫人の研究など、多方面で活躍されている。しかし、評者のように同志社大学に着任される以前から氏の研究に関心を持ってきた者にとつては、社会人教育や継続教育の研究者としての山田氏のイメージが強い。したがって本書は氏の本来の領域で大いに健筆をふるわれた書であるといえよう。ただ、遺憾ながら、(山田氏自身が予見されたように)この領域は変化が激しく、ほぼ2年前にかかれた書であるにもかかわらず、現状から見るとかなり変わってしまったという面も多々ある。ただ、現在ではなおさら、社会人大学院といえば、カルチャースターのようなもので

はなく、専門職大学院や開発系大学院をイメージするのであるから、山田氏の指摘は2年前よりも今日の情勢により当てはまるところが多いと言えよう。評者は現在、今春本務校に設置された法科大学院から授業分析を依頼され観察している。法科大学院では映画『ペーパーチェイス』でみられるような厳しい査問型の教師でなく、何とか引張り上げようというエンカレッジ型の教師が圧倒的多数を占めるようである。多数の院生を受け入れてふるい落としていくというアメリカのプロフェッショナル・スクールと異なり、比較的少数精鋭でふるい落とさずやっているとという日本の専門職大学院との差異がでているように思える。この教師像の差異は教育方法や教育内容の差異、評価方法の差異に大きく反映されてくるのであろう。氏に教えを請いたいところである。本書は読み物としても十分に楽しめる。社会人大学院に関わる教員、志願者に広く進めたい書である。

山内乾史 (神戸大学大学院教育研究センター／大学院国際協力研究助教授)

「伝統的ジェンダー観」の神話を超えて

山田礼子（大学文学部教授） 著



東信堂
3,800円

海外在留邦人が増えている。その多くが自分の仕事や勉強のための海外在住だが、それをきつかけとして海外生活に直面する人たちがいる。その子女と配偶者である。

本書は、後者、すなわちロサンジェルス近郊に居住する駐在員の妻に焦点をあてて、ジェンダー論の立場から書かれたモノグラフ研究である。彼女たちのジェンダー意識とその行動の特徴が1990年代前半とその10年後のインタビュー調査を中心に描き出される。

大企業の駐在員の妻である彼女たちは、90年代前半「伝統的なジェンダー観」を有し、それ

に沿った行動を保持していた。それは彼女たちのもと「伝統的な」状態に抵抗を感じない「均等法」以前の世代だったこともあるが、そこにはアメリカ駐在員の妻という特殊な生活環境が深く関わる。不慣れた英語での生活や子どもたちの学校への適応のための母親としてのサポートは彼女たちを家に閉じこめ、さらには働かなくても生活できる駐在員の恵まれた給与条件がそれを後押ししていたのである。

しかし、10年後の調査では駐在員の妻たちのジェンダー意識や子どもたちの教育に対する考え方も変化していた。その背後には、夫の将来の雇用についての不安や社会のグローバル化が関わっている。

特殊な事例であるが、ジェンダーに関わる意識や行動と社会環境との相互関係を考えさせてくれる1冊である。

尾嶋史章（大学文学部教授）

イスラーム統治論・大ジハード論

ホメイニー著・

富田健次（大学神学部教授） 編訳



平凡社
3,200円

20世紀には世界を揺るがした大きな革命が起こった。それらの一つに、現代の日本人にとって「特異な」イランのイスラーム革命がある。この革命から25年以上を経過したが、ホメイニー師が提唱したこの革命のイデオロギーは今もイランの政治体制に生きている。この政治原理こそ本書の「イスラーム統治論」で、この思想の内的理解なしには、われわれはイランとイスラーム世界を知ることができない。人間中心的で自由経済を原則とする西欧近代的な考え方を受容する日本は、神中心的で、

道徳的動機の優位を認めるイスラーム・シア派の流れにたつホメイニー師が唱える政治哲学をどのように理解したらよいのであろうか。西欧近代の立場からすれば、その思想は文明間の衝突の例に数えられるだけだろうが、編訳者の富田氏は、むしろ西欧近代の政治原理と対置させて、その特色を掘り下げて示してくれる。氏はイランの政治哲学研究の第一人者で、それだけに訳は信頼できる。その「解説」は比較政治思想の試みでもある。

この政治論の部分に対して、精神的な「自己との闘い」の必要が「大ジハード」論である。「ジハード」はすべて「聖戦」と訳されて日本語化しているが、それは「小ジハード」のことで、ジハードの観念を矮小化していることを知る。

加賀谷寛（大阪外国語大学名誉教授）